



ひなどり

園だより10月号
令和3年10月 1日
新潟市立新津第三幼稚園

「くだもののおはなし」

園長 川合 千尋



先月は、白根グレープガーデンでの園外保育がありました。子どもたちは、梨をもぎ取る体験をしたり、ヤギやウサギにえさをやる体験をしたりしました。園内には、梨の他にブドウもたくさん実っていました。そのほかにもキウイフルーツ、柿、クリなどの木もありました。おいしいくだものがたくさん実る季節になりました。

くだものには必ず花があります。くだものそのものはよく見えますが、その花となるとなかなか目にしません。そこで、子どもたちに何のくだもの花か聞いてみました。その形や色から想像していろいろと推理をしてくれました。「少し赤いからリンゴかな?」「たくさん花がついているからぶどうかな?」「近所で見たことがあるよ。」「えっ?これは何の花?」などみんなよく考えてくれました。

また、「ブドウはくだものかな?野菜かな?」「スイカはどう?」と聞くと、「ブドウはくだものじゃない?」「えっ、スイカもくだものだよ。」とこれもいろいろな考えが出て楽しかったです。ちなみに、「くだもの」の語源は「木になるもの→木のもの→くだもの」という説があります。また、農林水産省によるとスイカやイチゴは「果実的野菜」とされています。総務省は、実際の使われ方で果物としているそうです。つまり、農家の方が生産しているときには「野菜」として扱われ、お店に出ると「くだもの」として扱われています。

そもそも「野菜」とか「くだもの」という分け方はあいまいで、人間の都合で分けているそうです。クリはくだものとして取り扱っていますが、私たちが実際に食べているところは「種子」になるそうです。考えてみますと、私たちが普段使っている区分は、どれも人間の都合で作られたものばかりです。話は飛躍しますが、多様な国々、人種、老若男女であってさえも、その区分は本来、自然を前にしてはありません。あるがままを受け入れ、必要に応じて考えることが求められるようになってきています。くだもの分け方からそんなことも考えてしまいました。